

能登半島地震の特徴

2. 大規模火災(糸魚川火災よりも大)

- ・道路の損壊で消防車両の進入が困難
- ・上水道の断水で消火用水の使用が制限
- ・木造密集地で延焼拡大
- ・大津波警報で近寄れず消火作業が進まない

多数の安否不明者、生業の消失

- ・2月6日14時時点、安否不明者11人
- ・焼失面積 5万800平方メートル約300棟
- ・朝市を筆頭に多くの被災者の生業を失う
(密集地火災のリスク)

地震火災に備えて

阪神淡路大震災では神戸市長田区などで大火災。
7,000棟以上が全半焼した。もし施設周辺で火災が
発生したら？皆さんの施設から火災を出さない対策。
特に木造建物密集地は要注意！

- ・感震装置付き物品を使用
- ・ブレーカーを落とす(感震ブレーカーを設置)
- ・消火器等消火器具(設備)を設置
- ・避難する場合は必ず風上へ&低い所へ
- ・大地震では消火活動が困難に⇒1件でも火を見かけたら早期の避難を

1月11日





5月18日

1月11日



5月18日



能登半島地震の特徴

3. 12万棟を超える建物被害 (5/8石川県発表)

- ・古い木造住宅の多数が被害
(高齢者が昔から居住する住宅が多い)
- ・新しい建物やRC造も被害
- ・度重なる大きな揺れが被害を拡大

多くの死者・多数の避難者

厳しい避難生活

- ・2月6日14時住宅被害55,660棟(5/8 120,790棟)
- ・同 死者240人 安否不明11人(5/8 245人, 3人)
- ・石川県が氏名公表の129人中111人(約9割)が家屋倒壊による圧死・窒息死(石川県1月27日)
- ・15日 避難者数390カ所17,600人(5/8 275,4130)
- ・15日 停電8,600戸、断水55,500戸(— 6000)

建物被害に備えて

阪神淡路大震災では死者の8割以上が建物倒壊による圧死・窒息死。揺れが数十秒続けば倒壊の危険。南海トラフ地震では3分以上の揺れが襲う？

- ・住宅の耐震化(S56より前の建物)
- ・1階より2階が安全
- ・家具什器の固定(固定した家具で救われたケースも)
- ・停電、ガス、水対策

輪島市役所：外部支援職員への聞き取り

- ・輪島市職員のほか、各関係機関のリエゾン等が集まって本部運営をおこなっている。
- ・廊下や会議室のスペースなどで持参した折り畳みベッドを使用するなど簡単なもので休みをとっている。
- ・物資調整班など各種役割を分担して活動にあたっている。
- ・市の本部職員は限られた人数でほぼ不眠不休で対応に当たっていたが、インフルエンザが流行するなどで担当がいなくなり、うまく回らない部分もある。
- ・県のリエゾンなどうまく機能していないところもあり、対応が思うように進んでいないと感じられる部分も。
- ・支援が来てからは(1月14日以降)、輪島市職員10名程度、応援自治体職員や自衛隊などを含めて70人程度で本部運営。
- ・外部支援が来る前には、オペレーションが相当に混乱したと感じられる。国⇒県⇒市 県⇒市 市⇒各避難所等

5月18日



被災地自治体職員の苦悩

朝日新聞デジタル > 記事

医療サイト 朝日新聞アピタル トップ 記事一覧 連載

能登半島地震

輪島市で職員の約8割「過労死ライン」超え 被災自治体の過酷な実態

有料記事 能登半島地震

小島弘之 小川聡仁 吉村駿 石原剛文 米田悠一郎 2024年3月3日 9時33分



窓口で被災者に義援金の案内をする島毛祥瑛さん（右）＝2024年2月28日、珠洲市役所。吉村駿撮影

能登半島地震 から2カ月。元日から応を続ける自治体職員の過酷な長時間実態が明らかになってきた。1月の勤務（残業）が「過労死ライン」とさ100時間を超えた職員が、約8割に達しているもある。

被害の大きかった石川県内では、管理職を除く事務職の正規職員計2万5千人のうち、1月の時間外勤務が100時間を超えた職員が167人（約77%）に達した。時間外勤務も約148時間と、過労死ラインを大回った。

天気 書籍 占い 職業ジャーナル オンラインイベント



2024年3月29日（水）

トップ 速報 特集 雑談 社会 政治 経済 国際 スポーツ 環境・科学 カルチャー 暮らし・学び

特集 能登半島地震

この特集をフォロー

もう辞めたい…自治体職員も被災者 悲鳴あげた自治体職員 能登半島地震

九州朝日 社会 速報 災害・地震 石川 北信越

毎日新聞 2024/2/11 16:37 (最終更新 2/11 19:14) 有料記事 English version 1262文字



支援物資を仕分ける石川県能登郡職員の多田利洋さん。「職員はぎりぎりの状態です」と訴える。同町の柳田体育館で2024年2月9日。島川晋史撮影

能登半島地震の発生からまもなく1カ月半。住民の支援や復旧の業務にあたる被災自治体の職員から「このままでは倒れてしまおう」と悲鳴が上がっている。職員の多くは自らも被災しており、心身の負担を減らすための対策が急がれる。

発生1カ月半 自宅も片付けられず

9日時点で8人が亡くなり、住宅約5000棟の損壊が判明した石川県能登町。内陸部にある柳田体育館で8日、同町企画財政課職員の多田利洋さん、(48)が支援物資の入った段ボール箱に囲まれていた。都道府県などから派遣された応援職員に指示し、カップ麺や飲料水、消毒液などを配布先ごとに仕分けていく。「2日に入って週1日だけ休めるようになりました。自宅に帰っても片付けの気が起きず、地震発生当時のまま散らかっています」

能登半島地震の特徴

4. 支援者(マンパワー)の不足

・インフラ復旧、避難所復旧、ボランティア等々、被災住民をケア(支援)するのに必要なすべてのマンパワーが圧倒的に不足している。復旧や避難所環境の良化が進まない。支援を必要とする被災者と支援する側の人数バランスが全くとれていない。(ボランティアやっと1/27スタート)

5. 行政、教員、医療等職員への支援不足

・自らや家族が被災しながらも市民のため不眠不休で働く行政職員にスポットが当たらないが、彼らも被災者である。交代要員の確保による休息の提供はもちろん、心配な家族と一緒に時間を与えられる環境支援であったり、その他も含めて市民を支援する支援者への支援(ケアやサポート)が重要。

穴水小学校の状況

- ・2階と3階の天井と床が崩れていて人が入れるような状況ではない(1/10朝日新聞デジタル)
- ・校舎が避難所として使用できないため、グラウンドを自衛隊等の活動拠点として使用している。

●使用できる避難所が限定され1つの避難所にキャパを超える避難者が集まる傾向もあった。また、避難所指定していない施設や私有場所(ビニールハウス)等を応急的な避難場所として使用している住民も出ることになっている。

向洋小学校：避難所役員に聞き取り

- ・本来避難所となる体育館の屋根が壊れ、雨漏りがするので校舎の教室を避難所になっている。
- ・役場から修理要求は出ているが、冬季は業者が動いていない
- ・避難者が多く教室にぎゅうぎゅう一杯である。
- ・毛布やござなどを床に1枚敷いただけの硬い上で寝ている。
- ・お年寄りが多い。
- ・段ボールベッドを要望しているがまだ入っていない。ベッドが来ると場所をとるので、スペースがなくなり、この避難所から出ていけないといけない人もでるのではないかと心配だが早くほしい。
- ・水が出ないのが一番困る。洗濯やお風呂もできない。昨日、別のところで初めて風呂に入った。食事の時はお皿にラップをかけて洗い物がでないようにしている。トイレを流すのにバケツに水を汲んで流している。
- ・子どもたちが水汲みの手伝いをしてくれる。
- ・教室を使ってるし、水も出ないので学校(授業)は再開できない。

他自治体からの避難所支援職員に聞き取り

- ・50人収容程度の公民館に最大200人が避難していた。
- ・ぎゅうぎゅうで寝れない パイプ椅子や床で休んでいた。
- ・地震発生直後から断水。電気は数日後復旧。
- ・初日からトイレが使えない。便器からあふれかえっていたがそのまま使用していた。田んぼや山など外でしてくれといったが足腰の悪い高齢者が多く、屋内で用を足していた。
- ・毛布少量あるのみ。高齢者に渡した。ほかの人はなし。
- ・ノロウイルスが発生。高齢で足が悪い人が多いので土足で入っていた。衛生面を改善するためにトイレを清掃。輪島市職員や学校職員で清掃した。(市民は感染したらいけないので職員でした)20人くらいが感染。次亜塩素酸ナトリウムで清掃し、4日後には収束。便所に袋をかけるセットがきたので、それを使用し、以後発生なし。
- ・輪島市職員3人いた。県外からの支援者(16日～)がきて1人になった。

他自治体からの避難所支援職員に聞き取り

- ・職員も被災しているが住民支援の仕事をおこなっている。実家が崩れて、自身も家族と閉じ込められ救出された20代の女性職員は、家で隣にいたおばあちゃんが亡くなったが、市民のために働いている。持ち時間は仕事をして、帰る家もないので、終業後は自分の地区の避難所に帰っている。他市他県から応援がくるまでは休みなしで働いていた。
- ・物資が届きだして運営ができるようになった。高齢者が多く役割分担もできないので、市職員が中心となって生活環境改善などをおこなっていた。
- ・自宅から布団や毛布をとれる人は床に直接敷いて寝ている。
- ・暖房があったのが救い。看護師(京都から)2人が常駐で対応、ペット避難の獣医師会(石川県)が来たり、歯科医師会も巡回、DMATも。歯磨きセット、ペット用のケージなどを提供。一般のボランティアは見かけていない。
- ・避難所の運営は避難者リーダー(元校長先生)がいたが娘のところに2次避難した。犬がストレスで夜中に吠える理由。
- ・他の避難所でも住民リーダー(防災士 元自衛隊)は活動。

能登半島地震の特徴

6. 手薄な支援・悪環境での長期避難生活

- ・避難所が被害。限られた避難所へ避難
- ・道路寸断などで支援が大幅に遅れる
- ・長引く断水の影響極めて大きい

避難所環境悪化→関連死が危惧

- ・トイレ、洗濯、風呂、衛生面の不安
- ・寒さ,狭さ,硬さ対策,感染症等対策
- ・プライベートや女性・子どもの安全
- ・孤立地区の物資供給の困難

避難所の対策

これまでの災害でも避難所環境は決して良好ではない。自らできる対策を。

- ・自分が毎日必要なもの(眼鏡、薬等)は避難用も用意しておく
- ・寒さ、暑さ、硬さの対策(カイロ、冷えぴた、マット)
- ・断水対策(ラップ、ウェットティッシュ)
- ・支援に頼らない(支援はこないものと思って準備)

5月18日



6. 教育の再開の困難

能登半島地震の特徴

7. 時期を選ばない自然災害

- ・1月1日元旦にやってきた地震
- ・大学入試共通試験1週間前、高校入試1ヶ月前

8. 教育の再開の困難

- ・避難所となって学校教育が再開できない(仮設住宅も)
- ・断水などの影響も加わり再開のめどがたっていない学校もいまだ多数ある
- ・集団避難や個別遠方避難(親戚宅等)による分断
- ・岡山県災害時学校支援チームおかやま、兵庫県震災・学校支援チームEARTHなどが派遣され、学校再開や避難所運営の支援をおこなう

1月11日



5月18日

